西安事変と周恩来

羅瑞卿 呂正操 王炳南 著

西安事変と周恩来

羅瑞卿
呂正操
王炳南

外文出版社
北京

西安事変と周恩来

1980年　初版発行
著　　者　羅瑞卿　吕正操　王炳南
出 版 者　外 文 出 版 社
（北京阜成門外百万莊）
発 行 者　中 国 国 際 書 店
（北京 P. O. Box 399）

取 扱 店　東方書店（東京）亜東書店（東京）
中国書店（福岡）（株）内山書店（東京）
（株）満江紅（東京）朋友書店（京都）
（株）燎原書店（東京）中華書店（東京）

編号：（日）11050—147　　11—J—1529P
00110

まえがき

一九三六年十二月十二日、国民党の愛国将軍張学良と楊虎城が、部下を率いておこした西安事変は、中国の歴史上きわめて大きなできごとであった。西安事変は、中国共産党の抗日民族統一戦線の政策に感銘をうけ、積極的に「内戦停止・一致抗日」を要求した東北軍・西北軍の将兵たちの強い願望と炎のように燃えあがった中国人民の抗日救国運動を背景にしておこったのである。

一九三五年、日本帝国主義は中国侵略に拍車をかけ、中華民族はその存亡をきわめる瀬戸ぎわにおいこまれた。八月一日、中国共産党は『抗日救国のために全国同胞に告ぐ』を発表して、つぎのように呼びかけた。――あらゆる人力、物力、財力、武装力などを集中して抗日救国の神聖な事業につくすために、各政党間に、過去および現在、政見や利害のうえでいかなるちがいがあろうと、また各界の同胞のあいだに、主張や利害のうえでいかなる相違があろうと、各軍隊間に、過去および現在、いかなる敵対行為があろうと、すべてのものが「兄弟墻に鬩げど、外その侮りを禦ぐ」という真の自覚をもつべきであり、まずすべてのものが内戦を停止すべきである、と。

一九三五年十月、中国労農赤軍は長征に勝利し、中国革命にあらたな局面をもたらした。このとき華北の情勢はひじょうにきびしく、中国共産党はあいついで二回も宣言を発表し、抗日を願う全国のあらゆる政党、武装部隊、社会団体およびすべての個人が、広はんに団結して抗日戦争を推進するように、かさねて呼びかけた。こうして、一九三五年の「一二・九運動」に始まった抗日救国運動は、一九三六年の春から夏にかけて、全国規模の抗日のたかまりを迎え、民族危機が深まるにつれて、次第に発展していった。一九三六年八月、中国共産党中央委員会は、直接、国民党に文書を送り、ただちに内戦を停止し、全国的な抗日民族統一戦線をうちたて、神聖な民族自衛戦争を発動して日本帝国主義に抵抗し、中国の領土と主権を守り、失地を回復し、中華民族を救うように呼びかけた。つづいて九月一日には、『抗日を蔣介石に強要する問題にかんする指示』を発表した。これは、中国共産党が新しい情勢のもとで、日本帝国主義に反対するために、抗日民族統一戦線の結成を急速に推進させる英明な決定であり、中国共産党が全民族の利益のために、過去の怨恨を水に流した偉大な思想のあらわれであった。

けれども、蔣介石は、中国共産党と全中国人民の正当な要求をかえりみず、「外敵を打ちはらうには、まず国内を安んぜよ」という政策を堅持した。

中国共産党の正しい政策と、人民の抗日救国運動の勢いさかんな発展は、国民党内部に激しい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分化をひきおこした。

陝西省北部で赤軍を攻撃していた張学良をかしらとする国民党東北軍と、楊虎城をかしらとする国民党第十七路軍は、「共産党討伐」戦で惨敗をかさね、いっぽうでは、かれらの軍隊の大部分の将兵がみな抗日を願っているため、「内戦停止・一致抗日」という中国共産党の主張を受けいれ、赤軍との交戦を停止し、再三にわたって連共抗日を蔣介石に建議した。蔣介石は、張と楊の両将軍の要求を受けいれないばかりか、直系部隊二、三十万人を陝西省に派遣して赤軍を攻撃し、張、楊両将軍の部隊に打撃をあたえようとした。蔣介石のこの道理を無視した行動は、東北軍と十七路軍の広はんな将兵の憤激をかった。愛国の熱情にかられている両将軍は、蔣介石が「共産党討伐」を督促するために西安に赴いた機会を利用して、一九三六年十二月十二日に武力を用いて「直諫」を敢行し、蔣介石と当時西安に集中していた蔣介石の軍政要員数十名を逮捕した。そして、蔣介石に迫って、ただちに内戦を停止し一致抗日することを強要した。これが、国の内外を震撼させた西安事変であった。

西安事変の勃発は、国の内外にひじょうに大きな反響をまき起こし、緊張した複雑な局面をつくりだした。もしもこの情勢が発展すれば、中国は二つの前途のうちのいずれかを歩まなくてはならなかった。すなわち、そのひとつはこの事変のために内戦が拡大し、全国の抗日勢力が弱ま

り、抗日戦争の発展をおくらせ、日本帝国主義の侵略に有利な条件をつくりだすことであり、もうひとつはこの事変のために内戦が終息し、全国の抗日民族統一戦線が急速にうちたてられ、抗日戦争がいちはやく実現できることである。すなわち、西安事変を正しく処理できるか否かは、緊張した局面の転換と抗日戦争実現の鍵なのであった。

中国共産党と毛沢東同志は、当時の情勢に科学的な分析を加え、西安事変の平和的解決の方針をうちだした。周恩来同志をかしらとする中国共産党代表団は、西安事変を平和的に解決するために、党と人民の期待をおびて急きょ西安へ赴いた。めまぐるしく変化する情勢と複雑かつ激烈な闘争のさなかに身をおいた周恩来同志は、プロレタリア革命家の才能を発揮して、西安事変の平和的解決を実現し、その存亡をきわめる瀬戸ぎわに追いこまれている中華民族を救うため、不朽の功績をたてたのであった。

平和的な手段による西安事変の解決は当時、局面転換のきっかけとなり、内戦を抗日に転化させ、抗日民族統一戦線の結成と発展を促した。このために中国は国共合作の新しい時期を迎えることができ、全国の各党、各派、各界、各軍は空前の団結をみせ、全面的な抗日戦争を爆発させた。同時にこのことは、中国共産党の統一戦線政策の偉大さと正しさを内外に示し、党の威信をたかめ、革命勢力の発展を促し、日本帝国主義を敗北に導く道をきりひらいたのであった。

西安事変以後、蔣介石が信義にそむいたため、張学良将軍は現在に至るまで、ずっと台湾に監禁されている。楊虎城将軍も十二年間監禁され、獄内で、断固として蔣介石の投降勧誘を拒否しつづけていたが、全国解放の直前に殺害された。この二人は、軍閥に属していたふるい軍人のため、当然その思想に弱点や局限性があり、このため西安事変は勝利したものの、最後には完全に避けられる挫折や損失をこうむってしまった。「西安事変は蔣介石自身がつくりだしたのであり、蔣介石の抗日は、張、楊両将軍が人民の意思に従ったために、そうせざるをえなかったのである」、張、楊両将軍は「抗日戦争のために大きな手柄をたてた」という周恩来同志のことばは、まさに当をえているといえよう。一九五六年、西安事変二十周年にさいして、周恩来同志はかさねて、張、楊両将軍の愛国主義の思想と自己犠牲の精神をたかく評価して、かれらは「千古不滅の功労者」であり、その名は永遠に人びとの思い出のなかで生きているといわれた。

この本の筆者は当時みな西安にいた。羅瑞卿は中国共産党代表団の一員として活躍しており、呂正操、王炳南はそれぞれ東北軍と十七路軍のなかで、中国共産党の指導下による統一戦線活動にたずさわっていた。わたしたちはスリルにみちた西安事変を身をもって体験し、平和的に西安事変を解決する闘争のなかでしめされた周恩来同志の崇高な革命的品性をまじかに見てきた。西安事変からもう四十二年たってしまった。周恩来同志はすべての功労を党と人民に帰し、じぶん

の功労については、これまでいちども口にだしたことがなく、他人が語るのも許されなかった。このため、西安事変を平和的に解決するためにおこなった革命的な実践と大きな貢献は、長いあいだ埋もれていて、知る人があまり多くなかった。わたしたちは心から周恩来同志をしのび、同時にこの重要な歴史事件のてん末を、より多くの人びとに知ってもらうために、それぞれが執筆してこの本を世に送ることにした次第である。

筆　者

一九七八年五月

一　大変動の前夜

西安事変が、中国の歴史が大きく変わるその前夜に勃発したのは、偶然ではなかった。それは、日本帝国主義が中国侵略に拍車をかけたために、国内外の階級関係にあらたな変化をもたらした結果によるものだった。

日本帝国主義は早くから中国を独占しようという野望に燃えていた。一九三一年に「九・一八事変」をおこして中国の東北三省を占領し、一九三三年には熱河省を占領、つづいて、一九三五年には「華北事変」①をおこして、華北を第二の「満洲国」にし、一歩すすんで全中国を併呑しようとたくらんだ。中華民族は危急存亡の瀬戸ぎわに立たされ、亡国の大災難は睫眉のあいだに

① 一九三五年、日本帝国主義の華北侵略と、華北における国民党政府の国の権益を売りわたす一連の事件をさす。その内容は、「何応欽・梅津協定」にもとづく河北、察哈爾両省の大半の主権の喪失、日本帝国主義の漢奸を利用しての、いわゆる「華北五省自治運動」の推進、河北省東部の漢奸の手による、いわゆる「防共自治政府」の樹立、および日本帝国主義の「華北における政権の特殊化」の要求に応じて、国民党政府が宋哲元らを派遣し、いわゆる「冀（河北省）・察（察哈爾省）政務委員会」の樹立などである。

迫っていた。

「九・一八事変」がおこったとき、中国共産党はすぐに抗日宣言を発表し、中国人民はつぎつぎとこれに呼応して、日本の侵略に抵抗することをつよく要求した。労働者や学生や各界の愛国人士は、あいついで抗日救国運動をおこし、運動は空前のもりあがりをみせた。こうして、中国と日本帝国主義とのあいだの民族的な矛盾が、中国人民の主要な矛盾となり、国内の階級関係にはあらたな変化が生じた。広はんな労働者、農民と小ブルジョア階級が断固として抗日を要求したばかりか、民族ブルジョア階級、農村の富農や小地主までもが、これまでの態度を変え、国民党に属している愛国将校たちも、しきりに抗日戦争を要求した。

けれども、蔣介石をかしらとする国民党政府は、日本帝国主義の侵略にたいして、不抵抗主義をとったのである。「九・一八事変」の前夜に、蔣介石は国民党東北軍に「日本軍の挑発に出会ったら、かならず慎重に対処して衝突を避けるように」という命令をだしていた。事変が勃発したときにも、蔣介石は、「絶対に抵抗するな」と東北軍に打電し、「すべて国際連盟の指示に従う」ことを主張した。このために、数十万の東北軍はほとんど一発も放たずに山海関以南に撤退し、東北三省のすばらしい山河をそのまま日本に進呈してしまった。一九三二年、日本が上海で「一・二八事変」をおこすと、蔣介石は上海の抗日戦争を阻止し、日本とのあいだに『淞滬協

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

定』①を締結した。一九三三年、日本は古北口、山海関を侵略、熱河省全境と長城の各関門を占領し、北平、天津への通路を打開した。当時、長城各関門を守備していた中国軍は三、四十コ師団に及び、敵の十倍もあったが、蔣介石は「抗日を口にする者はすべてこれを殺す」といって抵抗を許さず、一方では中国の権益を売りわたす屈辱的な『塘沽協定』②を日本と締結した。これは実際には、日本の中国東北占領を認めたばかりか綏遠省東部、察哈爾省北部と河北省東部を、日本人が自由に出入りできる地域にしたのである。さらに、一九三五年には『何応欽・梅津協定』③

① 『上海停戦協定』ともいい、中日双方の調印当日から停戦、上海を非武装区とし、上海から蘇州、昆山一帯にわたる地区での中国軍隊の駐屯を禁止、多数地区での日本軍隊の駐屯を認めることなどを規定。

② 一九三三年五月、親日派の黄郛は蔣介石と汪精衛の指示にもとづき、北平軍分会総参議熊斌を派遣して日本関東軍の代表岡村寧次と塘沽で停戦を協定、売国条約を締結。

③ 一九三五年、日本侵略者は華北支配を強化するため、中国当局が東北義勇軍孫永勤部隊を援助、『塘沽協定』を破壊したといいがかりをつけ、北平軍分会に苛酷な要求をだし、武力に訴えて東北地区から山海関以南へ派兵した。南京政府は何応欽に日本側との交渉を電令。六月初旬、何応欽は天津駐屯軍司令官梅津美治郎と秘密交渉をもち、日本側の要求をぜんぶ認めた。これを通称『何応欽・梅津協定』という。その主な内容は、中国政府の河北省における党・政府機関の撤去、河北省駐屯の国民党中央軍、東北軍の撤退、日本側指定の軍・政府要員の更迭、抗日活動の全面禁止などである。

を締結し、東北を売りわたしたのと同じ手口で、華北五省の政治、軍事、経済の支配権をそっくり日本に進呈し、つづいて『広田三原則』①を秘密裡に承諾し、一歩すすんで中国全土の政治、経済、軍事の支配権を日本に譲ってしまった。

民族の危急存亡にかかわる重大なときに、蔣介石は「外敵を打ちはらうには、まず国内を安んぜよ」という反動政策をかたくなに堅持して、労農赤軍を「包囲討伐」し、たえず内戦を拡大した。一九三二年から一九三四年にかけて、かれはそれぞれ五十万と百万の兵力を動かして第四次、第五次の反革命「包囲討伐」をおこない、革命根拠地を攻撃した。さらに、一九三五年には、抗日のために重囲を突破して北上の途についた労農赤軍を、大軍で包囲追撃し、阻止しようと企んだ。これと同時に、蔣介石は抗日救国運動を残酷に弾圧して、愛国人士を逮捕し、人民を殺りくした。中国全土は白色テロの恐怖におおわれた。事実が立証しているように、蔣介石が不抵抗主義をとらなかったなら、日本帝国主義がこれほどまでに猖けつを極めることは不可能であった。

このような蔣介石の売国行為は全国人民の憤激をかい、反蔣抗日の叫びはしだいにたかまって

---

① 当時の日本外相広田弘毅の提出したいわゆる「対中国三原則」をさし、その主な内容は、一、排日運動の全面禁止、二、中国、日本、「満州国」の経済協力の樹立、三、中日両国の共同防共など。

きた。日ましに深まる民族の危機と広はんな大衆による抗日救国運動は、国民党内部の分化をひきおこした。一九三一年十月、日本軍が黒竜江省を侵略したとき、馬占山、李杜たちは蔣介石の命令にそむいて、東北でかれらの部隊を率いて日本軍と戦った。東北各地の抗日義勇軍の活躍もめざましかった。また同じ年の十二月には、趙博生と董振堂が二十六路軍の一万余の将兵を率いて、江西省の「共産党討伐」の前線で蜂起し、赤軍に加わった。一九三二年には、蔡廷鍇、蔣光鼐たちが国民党十九路軍を率いて上海で「一・二八」抗日戦をおこし、上海侵略にのりだしてきた日本軍と戦った。一九三三年五月には、馮玉祥が共産党に協力して、張家口で民衆抗日同盟軍をつくり、日本軍の侵略に抵抗した。すなわち、当時は、革命に有利で反革命に不利な情勢がかもしだされていたのであった。もしも中国共産党が、毛沢東の革命路線を実行し、団結できるすべての力を団結して、数千万の民衆を組織し、広大な革命の部隊を指導することができたならば、かならず革命のあらたなたかまりを迎えられたであろう。ところが当時は、王明の日和見主義路線が党内で支配的な地位を占めており、このため党の事業はきわめて大きな損害をこうむっていたのである。

一九三五年一月、偉大な歴史的意義をもった遵義会議は、王明路線の支配をたちきり、毛沢東の指導的地位を確立して、中国革命のために勝利の道をきりひらいた。

毛沢東は、当時の情勢と階級関係の変化にたいして科学的な分析をおこない、中国共産党の抗日民族統一戦線の政策と戦術を制定した。一九三五年八月一日、中国共産党は中央赤軍の長征の途上で、有名な『八・一宣言』――『抗日救国のために全同胞に告ぐ』を発表した。宣言は、国家民族の存亡にかかわる大難が迫っているとき、各党派、各界同胞、各軍隊は、過去と現在における、それぞれの政見や利害の相違をとわず、「兄弟墻に鬩げど、外にその侮りを禦ぐ」という真の自覚をもつべきであり、内戦を停止し、連合して抗日にあたるべきであると呼びかけた。また宣言は、国民党軍隊が赤軍攻撃をやめて抗日を開始しさえすれば、赤軍は過去と現在のいかなる宿怨も水に流し、したしく手を携えて救国につとめるであろうと丁重に声明した。一九三五年十月、中国共産党は赤軍が長征に勝利して陝西省北部についたのち、二度も宣言を発表して華北の情勢の危機を指摘し、全国の抗日を願うあらゆる政党、武装部隊、社会団体とすべての個人がはば広く連合して、抗日闘争をおしすすめることを呼びかけ、抗日連合軍と国防政府をつくることを主張した。

中国共産党の抗日救国の呼びかけと、赤軍の長征の勝利は、中国人民の抗日の意欲を大きく燃えあがらせ、抗日民主運動のもりあがりを促した。一九三五年十二月に、日本帝国主義が武力による華北侵略を強化し、国民党政府が妥協して投降し、民族危機がより切迫してきた重要なとき

に、北平の学生は、中国共産党の指導のもとに、率先して全国を震撼させる「一二・九」運動をおこした。学生たちは、「内戦停止、一致対外」、「華北反共自治反対」、「日本帝国主義打倒」などのスローガンを声たからかに叫び、二回にわたる大規模なデモ行進をおこなった。かれらは徒手空拳のまま、大刀やホースを手にした反動的な武装警察と勇敢に戦った。北平学生のこの救国運動は、全国の青年と各界人民の祖国を愛する情熱を燃えあがらせ、各地でつぎつぎと支援運動がまきおこり、全国的な愛国救国運動の新たなたかまりを迎えることができた。

あらたな情況は、中国共産党が日本の中国侵略以来の国内情勢により正しい分析を加え、早急に党の政策を決定して、党内に存在している濃厚な「左」翼閉鎖主義を是正することを要求した。一九三五年十二月下旬、毛沢東の主宰のもとに、党中央政治局会議が瓦窰堡でもたれた。これはきわめて重要な会議で、王明を代表とする「左」翼閉鎖主義の誤りを批判し、毛沢東のうちだした抗日民族統一戦線結成の政策を討論・採択し、『当面の政治情勢と党の任務にかんする決議』を発表した。この決議は、「団結できるすべての反日基本勢力を団結させるばかりでなく、団結できるすべての反日の同盟者をも団結させなければならない」、「たとえひとりでも反日戦線に参加しない愛国的な中国人があってはならない」と党の総路線をさし示している。会議のあと、毛沢東は瓦窰堡の党活動者会議で『日本帝国主義に反対する戦術について』という演説をお

こない、さらにすすんで抗日民族統一戦線にかんする党の理論、路線と政策をのべ、二回にわたる国内革命戦争の経験と教訓を、するどくえぐって総括し、日本帝国主義の中国独占政策によって生じた、中国の階級関係のあらたな変化にたいして科学的な分析を加え、中国共産党と民族ブルジョア階級が抗日という条件のもとで、ふたたび統一戦線を結成する可能性と重要性をくわしく説明した。毛沢東はつぎのように指摘した。中国の滅亡をたくらむ日本帝国主義の政策にたいし、中国の労働者と農民はみな抵抗を求め、小ブルジョア階級も抵抗するにきまっている。民族ブルジョア階級の問題は複雑ではあるが、その特徴は動揺である。植民地化の脅威に襲われている新しい環境のもとでは、かれらの一部（左翼）は闘争に参加してくる可能性があり、残された者も、動揺的な立場から中立的な立場に変わる可能性がある。「地主・買弁階級の陣営さえ完全には統一していない。これは、半植民地の環境、つまり多くの帝国主義が中国を奪いあっている環境からでてくるのである。」「民族的危機が重大な瀬戸ぎわにたっしたとき、国民党の陣営には分裂が生ずる。このような分裂は、民族ブルジョア階級の動揺にもあらわれ、馮玉祥、蔡廷鍇、馬占山ら、いちじ名をとどろかせた抗日の人物にもあらわれている」と。この透徹した階級分析にもとづいて、毛沢東は、「いまは大変動の前夜にある。党の任務は、赤軍の活動を全国の労働者、農民、学生、小ブルジョア階級、民族ブルジョア階級のすべての活動と合流させて、統

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com